

虚子と祖母ノブ

安波利一

昭和五十四年十月十五日高浜虚子の三女高木晴子先生をお迎えして、俳誌「玉藻」の「虚子曾遊地めぐり俳句大会」が私のところ富士屋旅館で開催された。

一行は関西汽船で別府入り、日出の城下海岸・鉄輪の地獄地帯を回り、鉄輪で一泊。翌十六日は志高湖・城島をめぐる、肥後小国へ向うスケジュールである。

この大会のために、俳句関係者が虚子の曾遊地を調査してくださったが、虚子は別府に九回足を運ばれている。その内、私の祖母安波ノブ（虚子はその著者で「飛松のぶ」としている）との関係に触れてみたい。

虚子来別の三回目（大正九年、四十六歳）、四回目（昭和二年、五十三歳）、五回目（昭和三年、五十四歳）の三度富士屋旅館に立ち寄られたようだ。四回目と五回目の場合は休憩のようで祖母と淡いロマンスがあったとされるのは、三回目の一泊されたときである。

その三回目は当時の別府町の招請により、虚子は別府・日出・耶馬溪に遊ぶ。文化人日名子太郎氏（元別府町長・日名子旅館主人）の案内で、七月十二日虚子は俳人の山崎楽堂・画家の小出檜重らを伴い、日名子旅館から特別仕立ての客馬車にのりこんだ。

亀川の温見・亀陽泉・血の池地獄を訪れ、柴石經由で海地獄を見物し、富士屋旅館に一泊した。富士屋旅館で詠んだ句は次の通りである。

汗人に一山越へて一温泉（ひとゆ）あり

湯煙を吹き払ふ時の風涼し

美しき人や蚕飼の玉禪（たまたすき）

温泉（ゆ）に入るや昼寝覚めたるかお許り

碧玉の腸出たる毛虫かな

右の句の内、“美しき人や：”の句は虚子も大変気に入り、七十七の祝いに出版した「喜寿艶」では、収録した七十七句の中にこの一句が入っている。

虚子先生は母に一目ぼれされたようだ、父利夫よりかつてきかされたことがあった。祖母ノブは佐伯の毛利藩奥家老だった古賀家から祖父利吉に嫁いできたが、虚子との出会いの時は四十八歳位、祖父が他界して十年の四十後家の身であった。肥満タイプだったようだが、虚子の気をひく美しさがあったのだろうか。もっとも俳句関係者の説によると、虚子は訪れる各地に一目ぼれの淡いロマンスがあったとか。

一泊のとき、虚子が祖母の絵を描いたそうである。それを表装した掛軸が富士屋にあり、父より見せてもらったことがあると大会の席で知人（大野保治大分大教授のご母堂）より披露され、ほとほと困ってしまった。大会関係者から、虚子が女の絵を描いたのは珍しい、虚子史伝の一ページを飾るとかいわれるのだが、父よりその絵を引き継いだ覚えがない。父から教えられたのは、一枚の色紙絵であった。これは小出楯重画伯が虚子一行の客

馬車乗姿を描いたものである。知人の記憶違いではと、失礼ながら思ってもみたが、医者で俳人の渡辺一魯先生と一緒に父より見せてもらったとのことで、私も何か責任みたいなものを感じるのである。

そういった虚子と祖母の関係から、句の“美しき人”は祖母ではないかと思えてならない。母に蚕飼の有無を尋ねたが、嫁いでくる前のことでよく知らない様子である。母が出たついでに触れておきたいことがある。市内のある俳人が祖母ノブと母サキを取り違えて、虚子と母の関係と題してある本に書かれてあるが、これは間違いである。虚子来館の折には、母は富士屋に嫁いでなかった。

父の生前、右の句について父にきいたことがある。父は、虚子先生一行が柴石から北鉄輪の旧道經由で鉄輪にきたが、北鉄輪の入口で休憩し（柴石からの急坂を登ったので人馬とも休んだのであろう）、その折虚子先生は蚕飼農婦の玉襷姿を見たらしく、祖母との出会いの後、祖母の玉襷姿として詠んだと、やゝ自慢気に話したことを覚えている。

それで大会の懇親会の席上、晴子先生に“美しき人”

は、やはり祖母のことでしょうかと申しあげると、先生はそうかもしれないと笑みをうかべながらいわれた。

晴子先生より記念の色紙をいただいた。

別府晚秋清し山並清し海 晴子

と詠まれてあった。虚子の本名は「清」。虚子ご縁の富士屋に「清」の二文字入りの句をいただき、彼岸の祖母ノブ・父利夫もきっと喜んでいるにちがいない。

萩宿の虚子と祖母との物語 年寿

〈参考資料〉

大分県ホトトギス句会会報第八十号

是永勉著「別府今昔」大分合同新聞社発行

盆踊り口説（一）

鈴木主水白糸くどき

別府市北鉄輪二組

田中三生

（本人病気のため、安波利一代筆）

北鉄輪・鉄輪、否朝日地区盆踊り口説の第一人者であった柏本亀鶴氏（故人）が、明治四十二年七月十日発行、発行者・大阪市南区松屋町三十九、榎本松之助の口説の原本を所有していた。年代を経た古い原本なので、その写しを作成するのに大変苦労し、一部中間不明も生じたが、ここに披露したい。

目次

- 一、鈴木主水白糸くどき
- 二、佐倉宗五郎くどき
- 三、白木屋お駒才三くどき
- 四、先代萩政岡忠義くどき
- 五、平井權八小柴くどき